

# 若き人々へ

谷口文章



もし、身体が突然不自由になり、わずかに口が動くだけとなったなら、私たちはどのように感じるだろうか。そのような人が、絵筆を口にして書いた絵画集の詩を紹介しよう。

〈生と死〉：おだまきの絵より

「いのちが一番大切だと/思っていたころ/生きるのが苦しかった/いのちよりも大切なものがあると/知った日/生きているのが嬉しかった」(星野富弘『鈴の鳴る道』)

ルソーは、人間は二度生まれるという。一度目は存在するために、二度目は理性の目覚めの時に。さらに、人間は二度生まれるだけでなく、人間は二度死ぬとも考えられる。一度目は母胎からこの世に出て肺呼吸する時に、二度目は生命体の死の時に。このように考えると、生と死は別々のものではなく、同じものの表と裏なのであろう。この世に生を授かる時の産声は、歓喜と苦しみの叫びなのだ。そして、もの心がつき、理性が目覚め、生の意味を考える時、ふと死の予感がする。それは思春期の苛立ち、青年期の未来への不安となって現れる。真実の生や自己を求め

る時には、深刻な生を経験するためである。

充実した生を生き抜いてきた人は、生に対立する生命体の死を超える「生」を体験してきたといえよう。それは、喜びである。

しかし、「いのちより大切なもの」とは一体何なのか。人は、それを「挫折」によって知るとも知れない。

〈挫折〉：はなきりんの絵より

「動ける人が/動かないでいるのには/忍耐が必要だ/私のように動けないものが/動かないでいるのに/忍耐など必要だろうか/そう気づいた時/私の体をギリギリに縛りつけていた/忍耐と棘のはえた縄が/“フッ”と解けたような気がした」(同上『風の旅』)

キルケゴールによると、絶望とは「死に至る病」であるという。しかし、挫折や絶望のない人生などあるのだろうか。「いのちより大切なもの」を求めて外へとさまよう時、結局は挫折しか残らない。けれど、目的は何であれ、自分にとって大切な「もの」を求める“過程”こそ、いのちより大切な「こと」を体験しているのだらう。

「忍耐」という観念が支配する限り、絶望がつきまとう。「忍耐している」体験は、あとから辛いと感じるもので、その過程はかえって充実感で満たされているはずだ。その時、人は挫折から解放されて「自由」なのだ。

〈自由〉：たんぼぼの絵より

「いつだったか/きみたちが空をとんで行くのを見たよ/風に吹かれて/ただ一つのものを持って/旅

する姿が/うれしくてならなかったよ/人間だってどうしても必要なものは/ただ一つ/私も余分なものを捨てれば/空がとべるような気がしたよ」(同上)

カントは、人間の尊厳は道徳法則に従う自由意志をもっていることだという。自らの生と死を引き受け、挫折しながらも精神が自由であるのは理想的だ。「大切なもの」を外ではなく内に求める時、絶望は希望へと反転する。すでに大切なものをもっていただけに気づくからだ。それは、自由な心である。

私たちは、あまりにも余分なものをもちすぎている。一つの可能性、一つの体験、それで十分だ。そのように気づけば、「愛」に支えられて心は自由に大空を飛翔しているのだらう。

〈愛〉：しょうぶの絵より

「黒い土に根を張り/どぶ水を吸って/なぜきれいに咲けるのだろうか/私は/大ぜいの人の愛の中にいて/なぜみにくいことばかり/考えるのだろうか」(同上)

パスカルは、人がこの世にあるのは愛するためにほかならないという。生の中の死、充実の中の挫折、自由の中の束縛、そのような呪縛から、人を解放し包むものは愛なのだ。愛とは、恋愛のような同一化する力だけではなく、さらに大きく「ゆるし」であるといえまいか。どれほど深く広く愛しているかは、どれほどその人をゆるすか、ということなのかもしれない。他人に対しても自分に対しても。

愛と憎を超えた「いのちより大切な愛」、それは人を拘束するものではなく、人生における無償の見護りであるのであろう。

(文学部教員)